

Ⅲ 研究会紹介

不老会

名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程

木田 勇輔

社会学講座の大学院生には、先輩がたから受け継いできた不老会という研究会がある。名称の由来は名古屋大学が千種区の不老町にあることらしいのだが、これまで時々のメンバーの関心に合わせて、比較的自由的な形態で研究会を行ってきた。2008年度から2010年度にかけては、主に「方法論研究会」と称して社会科学方法論に関する文献の読書会を行ってきた。ただし、2011年度は主要メンバーが多忙であったため、開店休業状態であった。しかし、今年度はその反省を生かし読書会を再開している。今年度より研究会の運営は博士後期課程の中根多恵さんを中心に行っていく予定となっているのだが、前代表者である筆者としては最後の仕事としてここで今年度の不老会の活動紹介を行いたいと思う。

昨年は開店休業状態であったため、ここでは今年度の研究会について簡単に紹介したい。今年度のテーマは「社会関係資本」であり、とくに同概念を理解するための基礎的な文献を参加者が交代でレポーターを務めながら輪読していく予定である。ここでは今年度のテーマ選択の理由について、簡単に記しておきたい。社会関係資本が社会学を始めとした社会科学において、ある種の流行となってから久しい。社会学講座における近年の修士論文のテーマ選択を見ても、社会関係資本の概念を何らかの形で取り入れた研究はかなりの数に昇るのではないかと思われる。

なぜこれほどまでにこの概念が今日流通しているか。その答えは色々と考えられるが、この概念が極めて実践的な、また場合によっては政策的なツールとしてここ十年以上にわたって流通してきたという側面は否定できないであろう。「社会関係」が資本として政治・経済・社会における現象に何らかの影響を与えるという観点それ自体は新しいものではないのだが、「社会関係資本」という共通のタームが普及することで分野間の横断的なコミュニケーションが可能となった。さらに近年では「社会関係資本」という概念はすでに行政関係者にもある程度広まっており、研究成果の実践的意義を強調する際に社会関係資本という概念は非常に便利な概念となりつつある。

一方で、学術研究の中では社会関係資本という概念をより正確に用いる必要があるということはいままでの間もない。ただし、社会関係資本という概念に合意された一義的な定義があるわけではなく、現在の社会関係資本の理論の中には複数の系統が入り混じっている。かつてはコールマンやブルデューといった社会理論の研究者たちは社会関係資本という概念を議論していたが、こうした前史の上に1990年代以降にはR・パットナムの『哲学する民主主義』(Putnam 1993=2001)やナン・リンの『ソーシャル・キャピタル』(Nan Lin 2001=2008)といった主要な著作が現れている。さらに、社会関係資本を集合的に捉えるパットナムと個人財的に捉えるのナン・リンの分析視角は今日では社会関係資本研究の二大潮流を形成しており、もし社会関係資本概念を実証研究に用いるとすれば分析視角を

詳細に検討することは極めて重要な作業である。そのため、社会関係資本という概念の豊かさを生かすためには、いま一度社会関係資本の基礎理論についての丁寧な「読み直し」をすることは極めて有用であると考えている。そして、こうした作業は直接に社会関係資本の概念を研究で直接的には利用しない大学院生にとっても、得られるものは大きいのではないだろうか。今年度の不老会で社会関係資本をテーマとした理由は、以上の通りである。

まず、2012年6月6日に行われた研究会では、社会関係資本論の入門書として稲葉洋二の『ソーシャル・キャピタル入門』（稲葉 2011）を輪読した。同書は入門書ということもあって細部に細かい疑問点はあるものの、日本における今日の社会関係資本研究の水準をコンパクトに伝えてくれる良書であった。8月上旬に予定されている2回目の読書会では、シーダ・スコチポルの『失われた民主主義』（Skocpol 2003=2008）を輪読する予定である。研究会の詳細は院生メーリングリストでお知らせしているが、参加者は随時募集している。一回限りの参加も歓迎しているので、ぜひ多くの院生の参加を期待したい。

文献

- 稲葉陽二, 2011, 『ソーシャル・キャピタル入門——孤立から絆へ』中央公論新社。
- Nan Lin, 2001, *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge: University of Cambridge Press. (=2008, 筒井淳也・石田光規・桜井政成・三輪哲・土岐智賀子訳『ソーシャル・キャピタル——社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房.)
- Putnam, Robert, 1993, *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton: Princeton University Press (=2001, 河田潤一訳『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造』NTT出版.)
- Skocpol, Theda, 2003, *Diminished Democracy: From Membership to Management in American Civic Life*, Norman: University of Oklahoma Press. (=2007, 河田潤一訳『失われた民主主義——メンバーシップからマネジメントへ』NTT出版.)

地域・調査研究会の活動についての報告

相山女学園大学 非常勤講師
前島 訓子

2012年で11年目となる「地域・調査研究会」は、実証的な社会学の調査をもとに、大学院生や研究者が研究発表をする場として2001年7月に発足しました。この研究会は、毎月1回のペースで開催しており、2012年6月に91回目を数えました。

この研究会は、既に終了した調査の結果や、進行している調査の中間報告を通して、共同討論を行い、「知の創造」をしていける場づくりを目指してきました。限られた時間の中で報告や議論を行う学会報告とは異なり、報告に1時間、質疑討論に1時間という時間を使うこの研究会は、分野に制限を設けず、また完成した研究であるか否かにこだわらず、自由に報告そして議論を行っています。